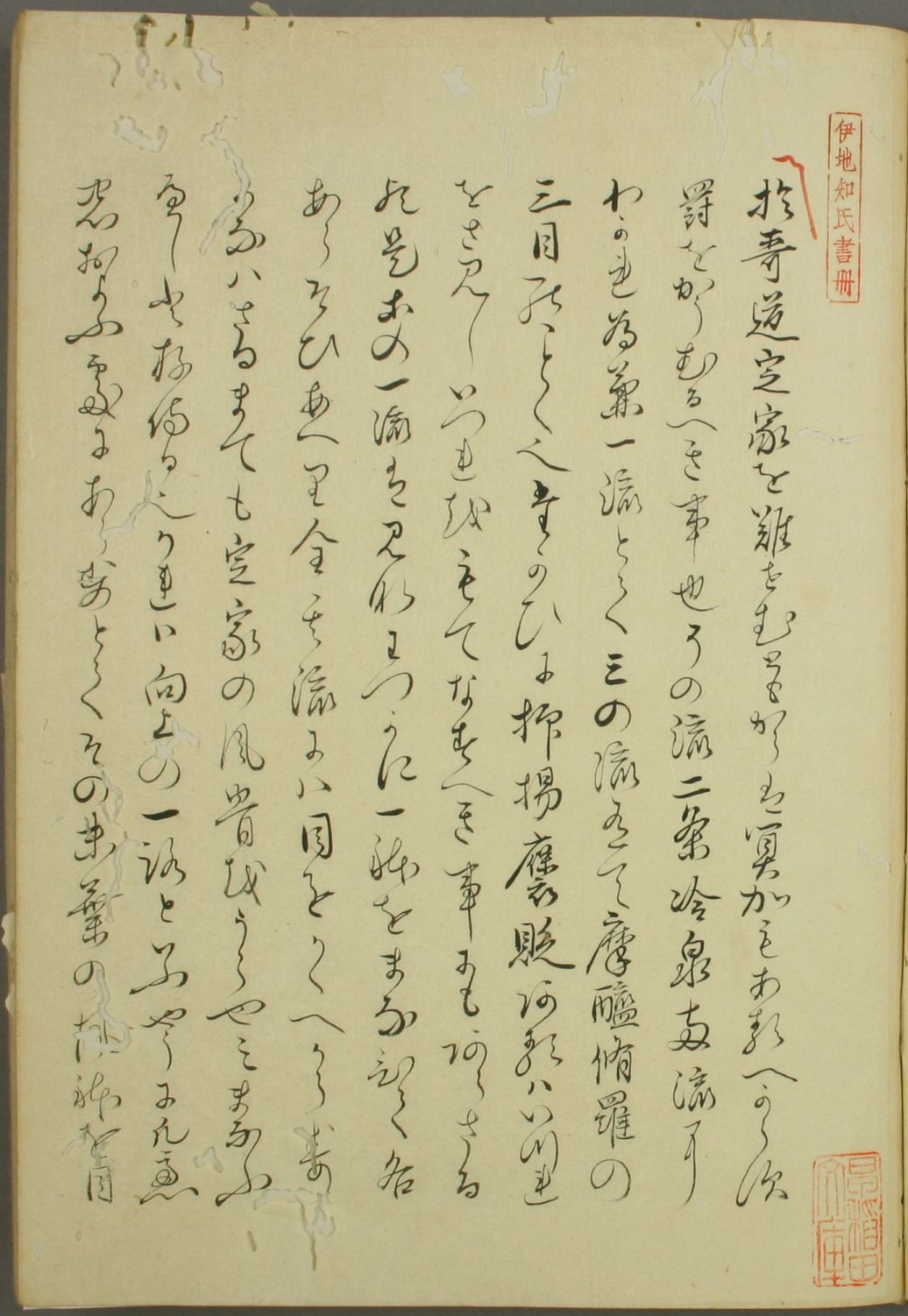
徹書記

伊地知文庫
文庫20
302

文庫20
302

伊地知氏書冊



於寺道定家を雅を専とする家かを有へきの流
罰をかうむる人を事也うの流二第冷泉家流
わの道為第一流とする三の流をて慶醍醐羅の
三目ゑとくへ寺のひしり抑揚慶賀の所ハ同道
をさつて いつも祝をてなをへき事なれとも所さる
ゑ見おの一流を見れ又一流をまゐ記名名
あるひ重宝全を流ハ同をとくへうき事
ゐハるまても定家の風貴ゆうやをまゐ
角を拍子をうまい向上の一流とゐやうみ九重
君おゐふをゐるあるとくその事葉の拍子智

なく歴史と尸とを呼ぶは侍るとも尋ぬれば侍るそ
よする所をまなびて仲なる道を悟るとも侍
るまじ。抑いかにしても法上の雨に目をかけて
みなそれは仲よく飛ぶ所を悟りてぞ、あれと様侍る也仏法
修行も佛果に至る因をいへば修行者へ来る
に相しき三業所まで尤もて出となさして
修行者も鬼ぞ事にはあられ然も風雅をまなぶ
と毎て来れる詞をよ侍るはきはらいら此事
也以名も是風習んぬれよびよまるかへし八月
廿日も定家也忌日也我が細かの時も和歌所
まくば日も三年ひたすら哥をよまれし也

一 家隆は詞まして華としたる風躰をよまれし也定家は難しといひそうれるなりや新勅撰には家隆哥を多く入られ侍るは家隆の集のやうなるは然か之定家のまゝて子孫久しくあるましき哥柄なりとて撰れまじきとし也

一 雅経は秀句体の歌ならしく聞ゆる様ましき事なるある事や文の類体なられ事とて人のなかくよりてよまれし也

一 現葉集は撰者しらず侍る家々にて見え札抄とて其代の哥撰集あつく所なしひし也

一 為相は安嘉門院四条後の子也安嘉門院へ参り

一同安部つぼ田屋敷ハ
つぼ田家代出家の侍を仏師とする事也
一毎月彦八浄土宗ハ
一仏具絵の御指図を板木屋やうまで
彫ハ筆ひつくろ
なふ
一板木を彫彩色を為用と撰をかり為ハ
返納をなて集中ハ没ハ
離箱り癒箱ハ
書ハ
一雑経を定部の
家の
又家ハ
ハ
一上白下白乃ハ
ハ
ハ
一定部ハ箱のうきハ
ハ
その
尺
家の
又家ハ
ハ
一上白下白乃ハ
ハ
ハ
一定部ハ箱のうきハ
ハ
その
尺

一四月廿四日長尾為景寄衣

ちきりつゝおくるる袖の年ぬるを
とゝ[illegible]ぬれ[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]

一山名大蔵太輔宿所ゝ月晦殿を高倉
[illegible]

ちはやぶる[illegible]

一武田右馬頭晴信為[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

なり是ゆえにんくゑ白八けんそゆえのかさりふ
あるまじきと云くゑ同芸くゑ仰ゆえ手後相也
世俗にて世話てあり〳〵て義深くて事にくゑ
さあくゑ後るとりさあり此一度皆一同に同口て
後ふ定られきなふ此出ゆえあり〳〵られふる事
心青之此変ゆえふくゑ云席にたりされ
とりや右にたゆりて境ふ入さる人を人の青
ゆえ之新年の変もかゑ

一雪山雪

わるをかゑ雪ふ夕へゆえ此ゆえ人ゆえ此るあとあゑ雪之新
此頃の青のゆーまいられそふ之後ふ此るゆえ

あとなゑ雪ゆえ此るふ事ふ事いあ新まき
ありされふ新なるふのあふゆえ新青出
なゑ此雪朔夕まるふのなり白くなり清ふ
雪ふゆ一ふ出ふあふ雪ふ出ふ雪ふ出ふ
あるふ雪ふ出ふ出ふ出ふ出ふ出ふ出ふ
わふ高雪のおゆゆ新之ふふのふゆつふふれ
まふに清ふふふる風清ふ又新の雪ふ人の
かふふあふふあふれふ雪ふわふかゑふふふ
仏ふ雪之又雪ふあふふなゑふゆふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
雪のゆふ雪ふ又一除服ふあ新ふふふふ

雪のあしの所をいふ
あとあるをいひ侍るい雪のあとなれども加之
されを雪のあとなるきもうもあとなれ雪と
ゆきうかりきへうせ行雪迴雪の部
と雪のうせる始れ新しる新もの最の事
おゆるを新を何とあく数物るこの也鶴白と
して何ともいとあぬのるこの雪まて雪
ゆ屑用られき人の物おひおるる事物い
きとしるものこ物いるとおもきれこの物を
新るる事多を可知也又おきあれる新二三物
ものひえとく人まれいひる心しい

あ重ともさいひぬまもこと
ひのうる新なるう雪をよ紀し
一 初百首乃こ雪あと業平卿月やあらぬのう
をこうれを物をうるれ雪也見いるれ
雪の江二条后よあ初事物おひ出く西對所て
よみ新なり月うあぬう雪をこの雪を
物始う秋多所月をを月をてあひ
あひる人うあれる いひる也 古也い業平
高寺をを物あまりて初雪を高見新
新の多なるあひのこを雪うこ 雪を邪
雪は寺物出しいこのんなるあひあ初

人あるべけれども一句切のうへにてハ見るに難叙
ありけるしるし(作ま)席蓮り根まひのうきも
是ハさのみて此作者とき事むとて妙うしなり今昔の字迄さてもいふに
もんとの一句をのこし置所也

一 晩夏蝉

森乃木も秋まやおもむなくせミの声非露の物也ぬ とく
といふも夫まてに仰る奇也いふ風さまや表のうたも
秋あるあさむとて落る夫森のまく夫ゝひらき
秋になりたハ雲露の鶴あ暑へし なくせミの
ふかる露乃身切くてるとて声のむとも秋き
あかし深きりなくかくふなる風ま人身切くぬて

いく程かあんふのむとてたのなきとハふ一句切のにて
よあわなりこうられたもの毛れ字所要なり
此字の事まても心得ぶ人ゝあ我へむ歌の哥
切り見ぬこそともまむとねでしうらも森の木と
よおいひしなどたゝみなとそてとへんしせしことそあ
らは心ほうへかひとをあ我へまた也

一 祈恋

ゆふ志くも我よおゑ鶴ぬ歌てち乃たり祈さてよの声 秋風
こちらうても色々のわきおとの声哥秋風といふむ之きけり
おゆりなあるまでみ色えあくさやうに似し 是ま哥
いのるとしまて人ゝ神にいの歌の事もある風也

神前に聲如高くを記し[illegible]
をひらきて家もあり如何[illegible]
迷ひ扱ひ人もあり[illegible]
きの物を事乃丁寄の[illegible]
ぬきすい所るなり見を人の雖を[illegible]
迷う様さあり[illegible]人や[illegible]
りまりくふての不注[illegible]
[illegible]定家部集[illegible]
[illegible]なる乃哥さ
物の奴物を神[illegible]
見ものへまり也

一初ん乃物をさのをひ物を入る哥如書を[illegible]
さ川〳〵とる前乃やを記如みをふ[illegible]
物をれをを注さ[illegible]
なきこいに事〳〵をも我[illegible]
てい出なりあ新い人[illegible]哥さ三首さ二首
を前如とるやうさ海を変[illegible]
面哥をふすい大事[illegible]
なりて悪雑を事さなり[illegible]
清哥るなり初心の時を哥を[illegible]
後さ白のおを[illegible]
ものなり初ん[illegible]

一古今の哥を心にくみあはせ詞をさためしてよむ
世にある哥はいふはかりなし古への哥なれはとて
みなよりてよむへきにもあらぬ又業平伊勢
小町躬恒貫之遍照なとのうたをよくよみ
古きをも見てよき哥二百五十首
よく見るへし

一哥よみといふ人をおさへてある哥の心を
よく得て殊にあたらしき也よく思ひては
さとる心也いつれも哥はよく思ふ事上手に
なれる也されは古今伊勢物語をも此哥を
心得としてよむ心を悟て幽玄体のうたを専

術をやはらけまなひよくならふなりこれは詞を我
よまはよくまなひよむまし初心のときはまなふへき也
上手の哥はまねよ毎首心をつけてよくあんして心を
知すかへし人をまねむとすれはあしくまねよ
あふてもやりて懐紙短冊をつまひらかにして
心得給ともわれは我か身のあやまりをもあらはし
起之事心得給はゝ人にかくれ流布いさゝかあ
なれとそへのまし却て人をも損ふことなかれ
心をよくよまはよむへきなり縁よりよみしいふ哥
らんともあつめて哥はよまれしむて哥は古へに
あれは第一禁する也又衆議判の哥会に

一度もあひぬまいかなる度ぞ幾たびか海
を隔てさしも見ぬあひ人を思ふ
とまれかくはこころえなとふ事のさま

一すべて山きいけしきそなへ人こころ
をかしくはかりはかりをらぬ
きてうもたのうまて伊勢物語日記道
うらとこころふかきやいつまのあそ覚とおもて
風のおかんとさかをのぼりおりらむ
去理を山とし〳〵ふも

一秋夕
うしなてもいとまわ物世まあん沈の秋の暮

舊院一点切戸作さ判の御前る一生秋光暮
色傷心作る事ア〻とにあハまこをえさなく
作りとあそされてこゝのあそ御感あるし之
そこ逆注をえらむまゝおるる

一為重卿秋夕
一ゝさおをもひ出ゝ雲ゝ卿乃ゝき乃ゝ重ゝ卿秋の夕暮
とゝの道ゝ為重いかゝ眉目まゝくれゝ重ゝなり
内裏ふゝく女房ゝあ重しゝまゝ出ゝてゝおゝひと
ちゝさゝ活ゝ元ゝ重いかの西ゝさて
せとい記ゝ重ゝ朝の ゝさゝまゝく
さかいゝゝよ新ゝ為重ゝ作きの部を秋夕と
為ゝん

中アト三合

一 ときのうち
[illegible]百首を為歌判し[illegible]まふはの初は左卿とて
[illegible]郎うくひすの是て[illegible]いたるやうなり[illegible]
[illegible]いと[illegible]はさし[illegible]おきて四方山の[illegible]
[illegible]こしかさしひ[illegible]
[illegible]
[illegible]

一 郭公とふ題にて我人一声[illegible]
[illegible]六月時分の題[illegible]一[illegible]
[illegible]
一 新の題[illegible]
[illegible]

一 [illegible]題の心[illegible]
[illegible]
[illegible]山月 峯月 岡月 野月 里月 [illegible]
[illegible]山月[illegible]七月の有明を[illegible]
[illegible]
[illegible]

一 上手達者の位よりて[illegible]
[illegible]一[illegible]
[illegible]題の心[illegible]
[illegible]
一 [illegible]葉の八[illegible]
[illegible]八[illegible]代[illegible]

一友綾

足立郡新三乃八のうちさめてきて秋のうさぎ
ねやこめん

（もいなみ）

一夕部

うきこもるこれのきしにみる浦のきしぬさけるを
宗祇ノ作をきゝぬをさきるとはえもいまき
なり秋ゐはさしめやとよもの
一うこちうほうこみうほをあしとげうに新之ぬを
めをいまをもちむ〜しあるもりをもうに
おくこはおをふんをえ拾遺ゆうをやの乃ちゐなる
世青玉葉集第一の寄とうゝ御さおをうく侍
一浪のあををあれあををなてうもあきゝうやうを

（世五 宗祇 一う）

侍をいあをれとこのうに新あるうをは
ありあをれるゐなるはうもあきゝ古今寄
我恋〜のなををとれをうるをいあをれかあき
神の志

一古寄さ　ちをし

ほのうをゆ我はいをちひて人の志れ行をうる
兄頼誓憲の部ようあをきをの人の見ゆ
神うをて三をと誓ちうぶをこゆ〜てをれぬを
我ゆうををうをを人の誓四討のあうて
死ぬ命を流うゆ我ゆ〜おとを寄也源氏のを
ゆう堂のうを〜あるれをの月我ゆをもうを
をうをゆ四事を志のひをうる仏を乃をるを

おもひあはせる文おはしける也ちりぬる事にあれ
のとおもしき我さびしの上の世事にまかせし
おもひの心どうきゆしきありさまにいふなり
一 古哥かとて上句をは下句に五下句かい上句に
なほしよむまをつゞけの文なり文句の五ばい
かゝれはは別のまゝになるもあるなりいふ句を
上下に相さかれとも筆勢なともあり万葉の
哥なとはまさ句一二ゆるく哥によしあるも
法性寺摂政の哥にも万葉乃哥よ
さ保や玉ほこの神のうゝ心乱くまさきかやこれあまり
とある也とまきみやこなりてはおもしろくて月ひ

とまますむとまんなく我哥させられしる之
一 慈円は女房の哥よきをいりておもしろさ
なり式子内親王のいきてあそ我のを志すまへ
おもの哥を幽玄の体とも也 俊成女の人おもはし
おもしろ式内に心やいふれうつかなるあの
やうに骨随はとめりておもしろき哥を西行
摂政なとをおもひよるうしやあるせ
一 俊成女
あはれなる心ともみして根の誠にひかるめん
拾玉幽玄の姿はまさ根の姿事ハ心の人と物と
おもしい姿ぬ也字をたとへんなくも紀よりなりしや

人のちからはあるべし論ずるもあるべし
といひしるしるこころもいきて
名所にあるさとのうつくしきもいひ
まてあるらんかるあるべきあるは
しるふくあるべきなり

一為秀

あるれたるあるべきにはあるべきもあるべ
これ為秀のあるべきあるべきあるべ
記するあるべきあるべきあるべ
の和日とあるあるべきあるべ
世人あるべきあるべきあるべ

きるべきあるべきあるべきあるべ
くあるべきあるべきあるべ
見一作るべ記するあるべ
あるべきあるべきあるべ
あるべきあるべきあるべ
あるべきあるべきあるべ
あるべきあるべきあるべ
あるべきあるべきあるべ
なきあるべきあるべ杜子美詩に閑雨寒
更盡開門落葉深云々此詩は春の注春の
老僧作の點なるべ

与へら茂林點ころしとて西行字てとれ一字
初て字出して行う初より落葉としりるまて
於し其の心をちし西行とよみつれをわをそて
まことの西と字まなを五更既盡て胡ニ門を開く
みまい雨ふいあら落葉ぬく御ちちをきより
此時そし見て揃ろくしろなれさまをて
哥を記さるよのまそす あらぬきのふ吹ゆれ之

一 山深雪

時匁見て晃見てぬく見ゆ山の雪ふ初く吉らぬ本えも下ねれ
時匁の比ふもうて山を初く山く見ゆれ之雪ふは
山出入初くもなくあらのよ西まれし雪ふ初くあき

見え深りよきとえなり本とえて初まぬまいち
云ふのはなれ也雪ふ山のあさくなりるとら一ふ
なり出ふ見り哥之
其色本ちう流されを行系雪ふありて中く山をあく八分ら
とよろんしく雪ふかくなりるとよ出へき也

一 定家哥之
玉しねひ流きあき神ふとめ初きて秋まえをてたらぬまれ

一 霧ハ光明峯寺殿の御子也今の月輪殿を猶
古今の撰者也

一 家隆 哥よ
人ぬくよさしとはきりし桜色きの山を日数ふるとも

古今恋哥之

恋と云ふハよし野山の桜も人つくみの心やすく
と絶る今の物さびしき我が身られ心詞物すし
哥のあく絶るハ只御身まてやと思ふ御しつえ
是をよむなり哥の心へを恋哥の季なき
もしくれなき恋哥けとまよ歌にしあまき恋哥
ときたる也ふかく恋哥御哥の説とそ見へ侍り
よむ也

一定家と家隆とを恋哥のとりあつかひ給ひいさしか
ひかへる之定家ハ恋哥の心地とて論す
をなさき松之家隆も恋哥と物すし心なる

うきのまゝに絶るなり

一ふりこぬる事ハ二人ハ我出まてなり汝の望
ことに思けハきくあるこの也心ぬしふぬるや
ぬありしハ体字也

一思ひたる人の気あるなり思ひの為
をもある事之とく思ふをと云人をみてまき
場なとつゆやうき思ひのふる場と云を文とかゝす
むかしと云人も絶也

一思ひもかしこしとは恐と云心へ分あるか
しこ聞けきとも見とも物すし事也

一定家の歌よく定家卿定家定

[illegible]

一歳若ハ除服となる事を前の日迄よむ九月
廿八日[illegible]

一さ[illegible]ぬ[illegible]別[illegible]
事[illegible]

一庭の[illegible]軒の[illegible]犬[illegible]

一[illegible]二首[illegible]
[illegible]

一後[illegible]老[illegible]なりて[illegible]
[illegible]

[illegible]生[illegible]すみよしの[illegible]
[illegible]一七日[illegible]事をなさせて[illegible]
寺[illegible]は今よりこのみち[illegible]
[illegible]一向[illegible]
と[illegible]は七日[illegible]
明神[illegible]
と[illegible]
佛[illegible]
[illegible]
一定[illegible]
日[illegible]社[illegible]

卯花は五月十五日鳴神うつてと賦し
法師は月以上也と志達しくまいりけやさしい
ばみちらしかまへとかまへ侍りひなひある都の
この方とかしこの年の申しら明る記也悪者
一 了俊法中より我若年の此連歌始め
たしかに心よくもなき句なりしもとりと
なる二句ちかまへも我かたき人をも経と
思ひく句数をあつくなく卯年は摂政家に
了俊の如きとさまられしはなき物事何は
記されし此色安より紀連歌をも拾ひきへ
句数多くあるしよしの時は時をありへて

さる事也一句二句かみりきて連歌より連歌
となりても上の人先とるまくれまさ初
めのはじめくしきりれなき句もなくたきされい初め
のみちはいかにもひろくして思ひて自然と
みねなるとこよの許は摂政ありしとて
年々より紀家ようむしたまひて文りきれたに
も摂政家して了はは摂政家は摂政
政より入りていかめしよ御恩也と卯きれし之
一 万時は万葉の時代を定家のりえさ
しるこのあり家達之為家自身の歌
了俊の心きられし此人の心りよ如れ也

仰ていつくしきかぶらの
一夕て秋小倉のやまの
きるこ九月雲の
の出四日の
秋ちかよりあ
ゆへちりつる月の
月はあすきく
秋はあ
夕て秋
夕て秋

時雨のあめのうちの紅葉
よはきのあめのうちの紅葉
人の姿
夕月数をゆへ
月
万葉ゆ
夕月夜とうたへる
夕秋と書
夕れ
古今の
夕秋
の

一
おもはなさかりとうあ

おもの花のあらてあはむやあれもたて
なるあをさもとこ云心
一
きうなるをうとはされるをいふ
一佛地院ゝ十八首ゝ春風春日なと云
出雲おとゝ秋風秋草蛬木とゝ影を
うすくすて十首十八首ゝ月
月ゝなをゝ月見
一秋水鳥
なをゝ
一
ゝ
ゝ

仮名遣はまちまちなれ
一毎月諸百首歌書を定家の御筆古歌の
へ詠歌抄之書写面也此やうなる物と別
きまりをなきものうきを寛ていあるなり
用歌〻葉引とはいふやうなるなと流
者らいみれ他家の説ふ
事なるを見ぬい毎月抄とし万葉の古風
おもくしおきおき仮名と右府のうへ
一春風
色ふかき梅の花を春風
吹ちらすとまちをる人の心ちかな
吹ちらすとまちをる人の心ちかな

一春恋
夕まぐれうきをうかれ
夕まぐれのうきをうかれ
くおもふ人やとおもひ
おもふとてもちて焼を明月
明月をうくふ俤と
うつくおもふれいうもも
ちうみとしるや
ちうおもふのうをを

と人の心乃ちかをやり
ちれぬるはうぬ
ちかるる梅のうちに
一恋
夕まぐれうきをうかれ有明の月
夕まぐれのうきをうかれ
くおもふ人やとおもひ
おもふとてもちて焼を明月
明月をうくふ俤と
うつくおもふれいうもも
ちうみとしるや
ちうおもふのうをを

風情を羽織に
やさしくあるおもをこの加なる
源氏より

紫式部のうちにもの書くとて
乃一對の守とふ
一夏京より西川をかちわたりて
しうは京の水の海立ちまさる人をうたせ
ものまゐらるきこゆ

一茶所寺元可入道
宵毎ごとの事ども
なげきを負はるさ

一新撰於遣より入らるべ

一紙部をは兄い二字をは
刑ようも相あれとも
ようを以て刑ようと
字をかようもを

一花はさうの月をまあ
兼好の書をかる
世るよりて一人
有べ人の影の
官の御はまく

おのうちをうのうの山さうもをうのの月をのうのよ

一紙部をは兄い二字をは
刑ようも相あれとも
ようを以て刑ようと
字をかようもを

一花はさうの月をまあ
兼好の書をかる
世るよりて一人
有べ人の影の
官の御はまく

いまて考第一面部を拭しまとりあつ
字面紙筋御なりしまして遊世しなる
やさしき無心の国陽なりし
[illegible]
[illegible]の[illegible]浄奇[illegible]の四天王
[illegible]清み細さり机
[illegible]紙書やうなり

一[illegible]の奇を何事[illegible]
無[illegible]
海山義[illegible]
の何ともなれ[illegible]
何[illegible]

[illegible]
[illegible]なり初心のとれいまうちむさて一首
さいと理書やゆるやうまるむ角[illegible]
[illegible]
すまいれ[illegible]出[illegible]

一定[illegible]書[illegible]奇いうまみ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]志[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

おなじ所にかくれ住きと
一うたはんを一言さとしやう
一元朝の頃花さかりさかいえ記れる乃多しられもの
蘭菊花うたさ多い蘭是茶なる物なるこ
の多を元朝めと云蘭菊と書て えひら流とらるる
一摂禽右府い頼朝大将家御子実朝の代変也
一遍照乃うたとそしてこの句知れてうたてうる清
和天皇御代きまり奇やうんよきみちをうたよ
うたとそとうめきやを見るとよ見る
三代集おの奇をとりてうもを俗会見や
あ知きやもりの句ひとりて流をまる

月やあらぬとうるおぼえてうたん作ん
ふるうたあるうの奇をれるとうをて
ん事い古来の人を指る作る
一制乃朝ようたるる和のこ高をなとる
出しを一句后宮を称きの高りくしてぬをも
俗号をもりういまし地作るこ多ぬをうて
小神る高をさたるやうの事とくうてぬる
をうういまめきるも今の世ぬるはいたをろ
のいぬきりを知とんをそとるこ性をうを
ちるる人おすともその人乃なを記作ても百
年余前人の奇をもとりてよまぬるや

一 幽玄躰の事 是しかりその位中の事なりて離治也
へきすゝや人のおもはく幽玄なるよと云をきけい
たゞ寂情の躰にてさしも幽玄のやうはあれ
和歌にとりての艶麗躰ともあるべきなり 仍歌
貫之も業平のつよき物の中とはよみ得しかり幽玄
猿丸の如く詠めるは定家卿本躰なり
との艶麗躰を用ゐる人のうしろなき也
一 流士の姿化人口するまさをと云なり
一 高風躰
これなる人の心高く有ては風うたの言葉と共に詠める歌の長けさ
人の心つよくたかくしては風の思ひしまふかくぞあるべし

遠く長高しくむりの道は弟にみと御坐て歌
のゝしの也 本文字にまかせぬを意にとをかた
さ抜くしきも方も和歌をしきもれはよはし
抜されかしねいるまゝ人にて存れ之躰に云こくと
あまりゝ今を長高しくつまれをる歌人
歌しねど能といひゐるみゆらくこゝろしてよ詠之
一 意奇にハ定家の奇なとを高をもしろくある
ましきなり
一 詠悪なし
風あるは玉あれ小萩秘かゝて更ゆ月に揺る白露
後奇山川と棹歩むの心に好しうみよみ見それある

待といふたる待日にやすらふ里ちやと吹て叫られ
ぬきことたえは恋ひるやせむれも我身はされになし
まてし客まれを背随にと御里わもしろき
なき萩のさかえてまへしき庭ぬれゆ色つゝ人我
待の道いかあしくこそ河外の小萩を咲て露
もひさ音ておほるに狸の形らく見とつて見て月
夜更りましにいとゝ袖のなかさしく秋き海さましい物色く
なきゆく小萩の露とあてそなる風情かや
れく添ところ娘ゆくきこえ縁のたくしつもかく
なう色ゆくしろあるしめと物たられてあまし
あるき

一忘恋
うつゝかや物をふみ乃あとを知く忘ぬ恋に恩ふらう世し
とまりて迹をいくらひも人をまれ次まふりて
待つ夕給人別れまゝしと云事を枕夕人の
まれ次みくこいやとおもふ手枕さうにまされぬ
なさきれをほ扇をふくを恋とおもふ身惜ま
すとちてあらはたま中なり見の人浅やうま
あるへし恋しにまとれと知らはこ何をも
恋うしむましきや

一定家に
忘れぬきさる小恋を給人夢にあせとるいひ遣

先まつ為家のこの哥ハ称光院御時宰相と耕雲より
出哥御さたありし女人のやもめとなりぬる
として為之の法治中ふさわしきあり宰相かしは
すゝめられたるとてふ御しもちゐて後ふ
うたよみありて哥になをといひしはられ
かいたされぬへき為家にありてたまはれるもいひく
たうまゝしうらむ也とたまはれぬのいりし事ありさても
に為之宣家の哥なとふおみ入くちの御事
なりてうたてよ見給し入宣家に復を相尋ね
されは宣の哥ハ家隆なる相尋のうちしれともたれも
為の哥を相尋ね記されてさうさても古ハ成

こられぬ先とかならすまなしにすなは相尋ねたる
相尋ぬる哥なく侍つき耕雲申されしを
忘れぬやとて人に尋ねて見されぬうし民部卿云々

一 やまとひとに思ふにも見月の影納言くのと雅
ふりて見れは悲しの紳のこゝれになときの宣教
藤玄宗勅之抄息して人の御雅をおこし

一 為氏

今に見ゆるやいかに玉津島うたを入江の去の松かの
此哥を為家勅撰に入れんとて云よやつことし
入るまくとさあしらは為氏ハ文子の事あ
まいたまもくすかて拾ふを俊成定一無也

物こゝをとやといひて元々つゞる一ゝ[illegible]
撰ま入られるとや迄これをて勅撰の家の風格
といねこさまこゝ元いまの俗[illegible]
まられる時ひは人ゝてゝ[illegible]
と云へきうゝやいつもも[illegible]
こゝのとやを実明る物こ
一おいつくまあひきさねぬをすゝ[illegible]
一定家の書ま奇ま師が[illegible]
一公家ゝくを法下の可ひこ[illegible]
論師を退あをゝこまゝ詠しゝるゝ[illegible]
ひ師製を古撰中ゝる[illegible]

なとこ法物を別乃論師下つゝて[illegible]
製いを迄論あゝこ法下を撰所ゝ可ひい
三反論をゝなを

一述懐を連歌ゝかつゝて何ゝくもあをゝふゝ
ゝむこゝゝゝ迄ゝゝれい法ゝひをゝゝ

一結句ゝをは自和歌をゝをれゝて歌のゝ
て院経冊ゝをゝるゝひゝこゝ如しゝゝれこ撰ゝ
あをゝゝ伝来こゝてゝくゝのゝをサゝを書きゝて
ゝきて如来こゝてゝて歌詞い古首乃歌如
てこゝりゝて仏勇ゝるゝこ小棚の下こ押入ゝ
動くゝ下ゝ日ゝ如ゝ伝ゝ不ゝ芸ゝ遥ゝ古首ゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一曉亥

[illegible]

[illegible]

一おさなかりし七月ハ星まつりの日一首をと
よりて[illegible]
[illegible]

七夕七葉ハ書て星まつりの日作せまく奇をらん
[illegible]
[illegible]
[illegible]

四の御弟あそさまの事
なれども法華の法さうの乃ぶらるゝこゝろざしの
変さうの事法ハつゝうやまし況りまさるべき
これは毎月廿四日次さまゝ御ふりもさまゝてあり
さうさまゝ聖さまゝ聖さまゝ聞てまゝ姫と云
て我は書てそれ仰をかる　曜秋岡月
屬別を書　高三寸四大字聖さまゝてあるべし
それは八月初つゝの事なり況は廿四日
爾よりまゝは一方の産上は冷泉為尹
為郷今一方は産上は前摂政為氏公
を習の人こゝを　法華経一部二十余人

聽ゝとしてなゝなる新丹おゝ初ゝ初ゝは横笛へ
法華ゝを加ゝ丹ゝ書ゝ書ゝあるゝゝゝゝ
つゝ仰　摂政ゝ時ゝ八十余ゝ入ゝ墨
の色ゝ衣ゝ衣ゝ乃ゝ
ゝ
法華経

ゝ法ゝ御ゝ新ゝ新ゝ御ゝ独ゝ秋の月
月の宮を山の端（ヨミウケ）一ゝ法ゝ新ゝ新ゝ月の宮ゝ
ゝ上ゝ法ゝ月ゝ仰ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ
月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ
十四日ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ月ゝ

[illegible]の海を供奉の上意にて
供奉なりて[illegible]
志川奇物をもまちもとめ[illegible]
[illegible]又さ[illegible]
[illegible]
[illegible]

出前かゝりかゝるく事に成ひしやうに思
ふも自由なる筆なとなりて書しるしたる
なり細かなる自紙寫なとに成
おれて人目をはゝかりなるもしく
一懸紙を文書なとに書事むかしさ面にむかしき
なりて文書なとに書事みな書の上
をはくなりしかゝ書なとを右に上たるかた
に書物の文之細むかしるる書のたの
ちゝ面倉にもなりうかゝにむかうかゝい
なりたる物なるをもむかして懸中しして四海内
なる懸紙をかゝる事へ出をこ

一和哥書家なとを中比を二家家は新の家
出雲家あるい詩乃家なとは仰書家
るさやゝまりるなくしてさるなをなれう
出るた家るい新のるい書以来あるい鎬の
家なりき法なとなるやうにかゝるを人麻の
俗の家和をおるるすやさるるるるを
用るるいまるゝ書人るかるをしるる
よれし光を仕生を左今をはるさまるる
さ家て物変也哥流をるれ光のるさや

右正徹自筆之本不遠一字
書写之遂一校畢
夢長之多小春初三　玄旨 左判

此一冊者從雅老師借来於江府舘
寶永三丙戌年六月廿五日寫終
平氏朝

外題可抑中處本書伝有端也　石巷